
聖ルナマリア学園百合事情

如月愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖ルナマリア学園百合事情

【Nコード】

N6436I

【作者名】

如月愛美

【あらすじ】

良家のお嬢様だけが通えるという学園、聖ルナマリア学園。
女子学園の百合な話！

第一話〜愛との出会い〜（前書き）

初投稿の連載小説…って、過去にひとつ作品あったし…
完全忘れてるけど気にするな！ちっちゃいことは気にするな、それ
ワカセ（黙れ）
まあ、楽しんでくれると嬉しいです！

第一話〜愛との出会い〜

朝日がさんさんと照りつける朝の日。私は聖ルナマリア学園の門をくぐる。この聖ルナマリア学園は私が通う女子校だ。聖ルナマリア学園は、勿論、生徒は全員女子だし、良家のお嬢様ばかりなので尚私好みなのだ。聖ルナマリア学園の制服はかわいらしく、自分で着ただけかわいいと思ったのに、そこまでかわいい制服を他の女子が着ると考えただけで……ハッ！！私は朝から何と淫らな想像をしているのだろう…

無論、この学校には男生徒がない。私は男嫌いなのでそれは本当によかったと思う。しかし、男教諭という存在には入学してから苦しんでいた。私は大の男嫌いで、男の手すら触れなく、触った瞬間吐き気がするというレベル。私が男教諭との問題は結構起してる。私は今日、私のクラスに転校してくる、如月愛（おんつきまな）という女性に興味がある。まだあったことはないのだけれど、私の興味が惹かれたのはこの時期の急な転校だ。いろいろ理由はあるだろうけど、この時期に転校してくる子と言うのはやはり惹かれるものだ。

「ごきげんよう」

この学園の挨拶は、昼でも朝でも夜でも、すべてごきげんようなのだ。その挨拶を使う柔らかく綺麗で透き通った声が後ろから聞こえた。不意のことだが、決してあわてて振り返るのはいけない。ゆっくり、セーラのフリルを乱さないように、軽やかにそして、しなやかに振り返る。

「ごきげんよう」

私も最高の笑顔で挨拶をする。目の前に目に現れたのは、美少女だった。髪をツインテールにしている。髪をくくっているのはおつきく丸い髪留め。私はこの学園のすべての女の子をチェックしているが、ここまでの美少女はいただろうか。…いや、いない。私は直感した。彼女こそが期待の転校生、如月愛だ。しかも、私の期待を遙

かに超えている。

「あなた転校生？」

一応確認しておこうと、彼女に問う。彼女は笑顔で「はい」と答えた。

「そう…私、遠藤舞。よろしく」

私は握手をしようと彼女の前に手を出した。

「私は如月愛です。よろしくお願いします。」

愛は私の手を握り、握手した。愛は優しく微笑んだ。愛の頬笑みは美しく、華麗だった。

「愛さんは二年百合組でしょ？」

二年百合組。そう、私のクラスだ。転校生が私のクラスに来るというのは事前に知っていた。情報網は一般の生徒よりかは上だと思っ別に嗜好きというわけではなく、私の父がこの学園の園長と知り合いで、学園の情報を父に聞けば、すぐに教えてくれるのだ。

「はい」

愛は即答した。

「私も二年百合組なの。一緒に行かない？」

私は、手を出した。

「私、先に職員室に来るように言われているので。お気持ちは嬉しいのですが…」

まなは上品に私の誘いを断った。

「そう…残念。それじゃあ、教室で会いましょう」

「はい」

愛は去っていた。私も教室へと向かう。

教室に着く、教室は転校生の話題で持ちきりだった。私はお気に入りの子と話す。お気に入りの子とは、私が入学して、新しいクラスになって、最初に好きになった子だ。このことは二年間同じクラスで、私はこの子のことを好きなのだが、この子は女の子には興味ないというか…私も私で友達じゃなくなるのを恐れて告白なんてできずに、気の合う親友という関係を維持している

「ねえねえ舞、今日転校生来るらしいよ」

お気に入りのその子は後ろの席で、加藤加奈という名前なのだ。席替えの時、私がこの子の前になれてすごく嬉しかったのを覚えていいる。私が席に座る時、軽く挨拶を交わしてから、彼女の方から話しかけてきた。

「さつき会った」

私は結構無愛想な性格で、あまり大勢の友達ができるという人間ではなかった。それでも加奈は、私に対しやさしくしてくれる。多分、そういうやさしさは今まで受けたことがないから、きつと嬉しくて嬉しくて、それが好きに変わったんだと思う。

「どんな子だったの？」

私は教科書を全て机の中に入れて、席ごと後ろ向いて話し始める。加奈はすぐくわくわくした瞳で聞いてきた。

「綺麗な子だったわ、すごく上品でいかにもこの学園にあいそつって人だった。」

私は、加奈を少しからかうのが趣味なのである…

「気になるの？」

「うん、転校生ってわくわくする！」

「なんでわくわくするの？」

「…そ、それはその…なんでだろう…」

頭に？という文字を浮かべてそう中をした。疑問に思う人の顔ってこういう顔だろうという顔。

「ねえ、なんでわくわくするの？」

「うん…」

周りがきゃーきゃーという声でうるさくなる。何事だと思って振り返ると、私の後ろに愛がいた。気付かなかった…

「新しい物には誰だっってわくわくするでしょう？」

愛は私に言った。間違いなんでなく、正しい事を言ってる時人間の顔。きりつとした目、迷いなんて一つも感じられない。

「そうね…」

私は黙ってしまった。今朝の雰囲気よりはどこか違う…

「意地悪はダメよ。彼女困ってるでしょ？」

確実に私を叱っている。朝は私に敬語を使っていたのに…いや、それは私が上級生に見られただけか…

「そうですわね…ごめんなさい」

愛は納得したような顔で私の隣の席に座った。隣の席の子はついてこないだ、親の転勤で他県にある聖ルナマリア学園に転校したのだ。

愛はクラス中の子の質問にはつきりと答えていた。こんな学園の生徒でも一応

は、女の子。普通に群がって話すのだ。

「彼氏はいるの？」

ある女の子の質問は私も気になった。

「いないわ」

愛ははつきりとした口調で言った。多分いないのだろう。そして、

愛は言った…はつきりとした口調で…

「彼女ならいるけど」

その一言でその場が凍り付いた。質問を口々に言おうとしていた人が一斉にぴたつとなった。空気が凍り付く、なんて言葉はこういう状況をいうのだろう、と改めて実感した。

「そうなんだ…」

確実にみんなが引いている。さっきの仕返しにフォローでも入れてやるうか…

「みなさん、別に私は悪くないと思います」

私は席を立ちみんなに言った。

「私も女の子が好きです。でも、その何が悪いんですか？他の国は同性でも

結婚してましてよ？」

あれ、私、愛を庇っている…今更気づいた私…フォロー入れたら逆に状況がわるくなるというのを望んだのだが…まあ、いいや、愛に好かれるかもしれない。

「あの…冗談ですわよ」

後ろから凍った空気と沈黙をぶち破る綺麗な声が聞こえた。

「へ？」

私は思わず、振り返る。

「彼女なんていませんわよ」

…これじゃ私がレズ宣言しただけになる…

「でも、私も悪くないと思いますわ、でもまあ…私はちゃんと男の方が好きすわ」

はいはい、そうですね…みんなが軽蔑の眼差しで私を見てくる。先生が来た。みんなが自分の席に座る、私は無言で席に座る。

先生によるHRが始める。先生の話を呆然と聞き流す、私は心ここにあらずという感じだった。クラス全員にレズと言うことがばれてしまった…さようなら、普通の少女だった私…普通の位置をキープしていた私…と、そんなことを考えて放心状態の時に、誰か私の肩を軽く叩いた。放心状態の私の意識は戻り、叩かれた方向をみた。まなさんが紙を持ってわたし

に手を出してる。回し手紙だろうか…私はそれを受け取る。紙を開く。そこにはまなからのメッセージが書いてあった。

「さつきはごめんなさい。かばってくれたのに…」

私のことをフォローしてくれているのか…まだ続きがある。

「実は私もレズなんです…やっぱりみんなに言えなくて…よろしければ、休み時間に話がしたいです」

愛が紙を見ている私をじつと見つめている。

私は彼女の方向を見て、OKと指で表した。

そして、休み時間になる。私はまなの肩を軽く叩き、歩き出した。クラスの視線が痛いのを耐えながら、愛も私についてくる。私は誰も来ないような場所に来た。聖なる花畑という、花畑だ。

そこで、ベンチに腰をかけて、話し始める。

「さつきの紙どういう意味？」

「実は…私、男の方は嫌いな方でして…」

「何で？」

「小さい頃に…ちょっと…」

…愛が泣きそうになる。止めなくちゃ

「別に嫌なら無理に話さなくても」

愛が泣き出しそうになりながら俯いてる。

「別にいいんです…話します…」

愛は泣き出すのをこらえて話し始める。

「私、小さい頃に…兄に犯されたんです…厳密に言うと、兄とその友達に…兄が友達と遊んでるときによばれて、兄の部屋に行ったら、いきなり服を脱が

されて…それから覚えてないんです…」

何も言えない…レイプだなんて…

「…私も…レイプされたことあるの…」

私からも話し始める。愛は驚いた顔をしている。

「私もね、小さい頃に、知らないおじさんに誘拐されて…」

愛は、私の話を聞いて、泣きながら俯いた。

「前から女の子を好きになってたりしてただけど…そのせいで男の人にはさわれなくなっちゃって…」

「舞さん…」

泣きながら私を呼ぶのが聞こえた。微かな声で聞こえるかどうかわからない程度だった。

「大丈夫…愛さんは私が守るから…」

愛を守りたい。そんな想いで、ぽつと言ってしまった。初対面なのに…絶対守らなくてはいけない気がした。

「ありがとうございます…舞さん…」

「ううん、私が守ってあげただけだから…」

「舞さん、約束ですよ。ほら、指切り」

愛は小指を出した。私はやさしく小指をあわせ

「うん、指切り」

指切りした。

第一話〜愛との出会い〜（後書き）

まあ、短いと言えば短いかな・・・まあ、連載だしW

男の手すら触れない繊細すぎる…

私の知り合いでレイプ経験がある人いますけど、ここまで重症化し

ません…よほど恐かったんでしょう…

まあ、次回にご期待ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6436i/>

聖ルナマリア学園百合事情

2010年10月11日04時46分発行